



# 日本獣医生命科学大学

NIPPON VETERINARY AND LIFE SCIENCE UNIVERSITY

## 日本獣医生命科学大学における 獣医学教育改革の現状と課題

佐々木典康、和田新平、鈴木浩悦、小山秀一

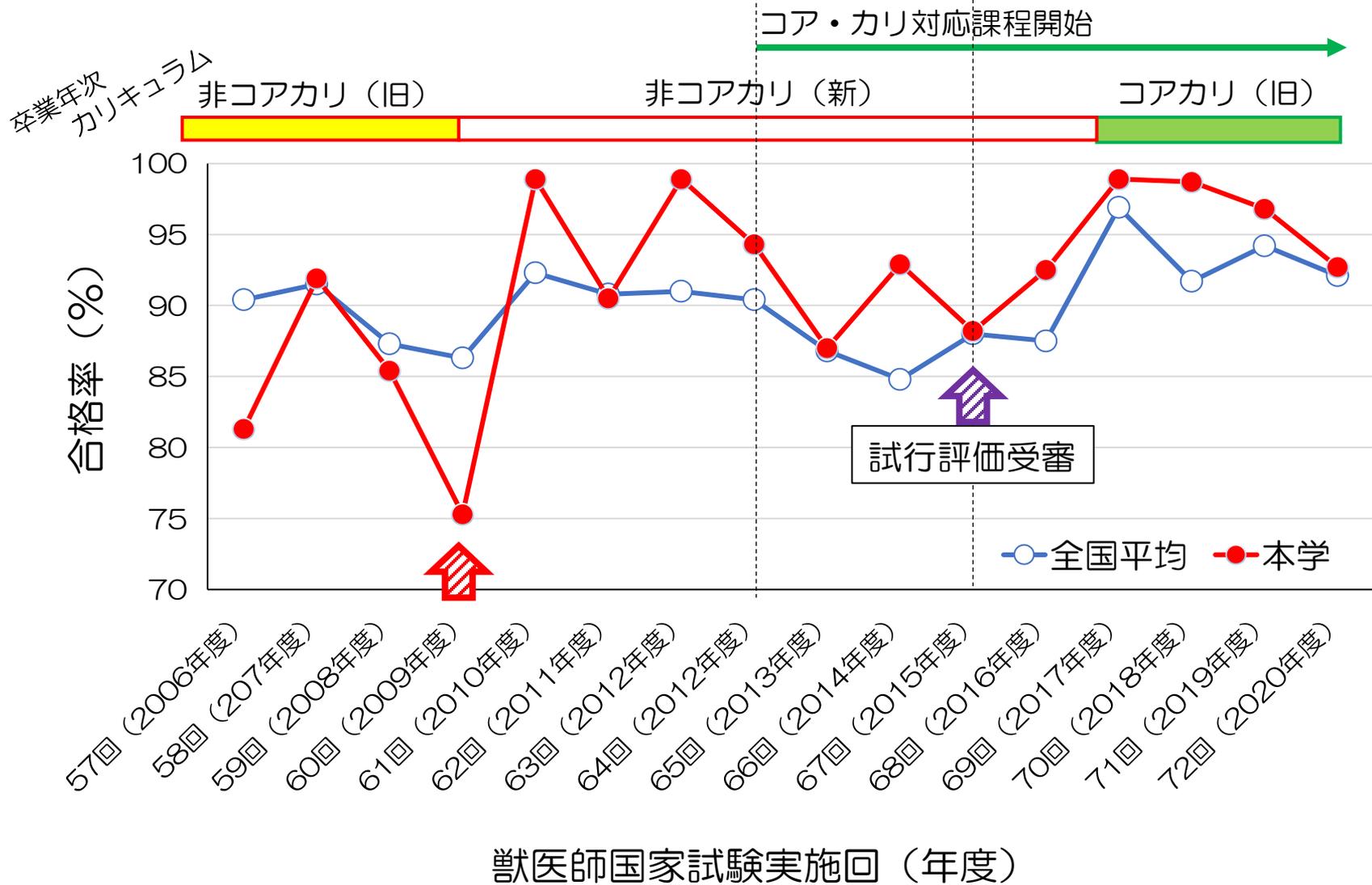
(日本獣医生命科学大学・獣医学部・獣医学科)



# 日本獣医生命科学大学の軌跡

- 1881（明治14）年開校の私立獣医学校を起源（最初の私立獣医学教育）
- 1979（昭和55）年、わが国の獣医系大学として最初の魚病学教室（現・水族医学研究室）を設置
- 1984（昭和59）年、わが国の獣医系大学として最初の野生動物学教室を設置
- 1989（平成元）年、私立獣医系大学としては最初のCT装置を家畜病院に導入
- 2000（平成12）年、心理学教室（現・比較発達心理学研究室）を設置
- 2005（平成17）年、獣医療技術専門職を養成する学科として、日本初となる獣医保健看護学科を開設
- 2015（平成27）年、わが国の獣医系大学として最初の獣医事法学研究室を設置

# 獣医師国家試験合格率の年次推移



# 近年の獣医学教育改善への取り組み

- 2004（平成18）年度入学者以前のカリキュラムは、5-6年次の時間割に無駄が多かったため、2005（平成19）年度入学者から新カリキュラムを導入。
  - 5-6年次での総合臨床実習を増やすカリキュラムとし、臨床実習のウェイトを増加した。
- さらに2012（平成24）年度入学生からはモデル・コア・カリキュラム対応のカリキュラムを導入。
  - モチベーションが低下しやすい1年次に基礎専門科目を増やすことで学生の就学意欲を上げ、5-6年次での総合臨床実習を充実させる形で改革を進めていた。

# 2012（平成24）年度コア・カリ対応カリキュラム導入時における学科内議論

- 既存研究室と担当科目をどのように割り振るのが問題となった（例：行動学を比較動物医学研究室が担当するべきか、比較発達心理学研究室が担当するべきか）
- 実験動物学は基礎分野ではなく、応用分野ではないのか？
- 毒性学を複数研究室で担当する場合、分野横断的な協力が可能なのか。研究室を作るべきでは？
- 臨床重視という点では旧カリキュラムと同じであり、改訂することの目的が不明瞭。将来的な教育研究体制を定めて、どのような人材を育成するために、どのようなカリキュラムに変えるかの議論が必要



# 2015（平成27）年度、大学基準協会による獣医学教育の試行評価受審

- 2015（平成27）年度、大学基準協会による獣医学教育の試行評価受審（本学および東大）
- 試行評価の結果は「基準に適合」であった。
- 本学の獣医総合実習（総合参加型臨床実習）において学外（農業共済組合）と学内（付属動物医療センター）の実習を義務付けている点は特色として評価されている。
- また「病院経営学」「鳥・特殊動物の臨床」「獣医救急医療学」「魚病学実習」「野生動物学実習」などのアドバンス科目の配置も評価されている。

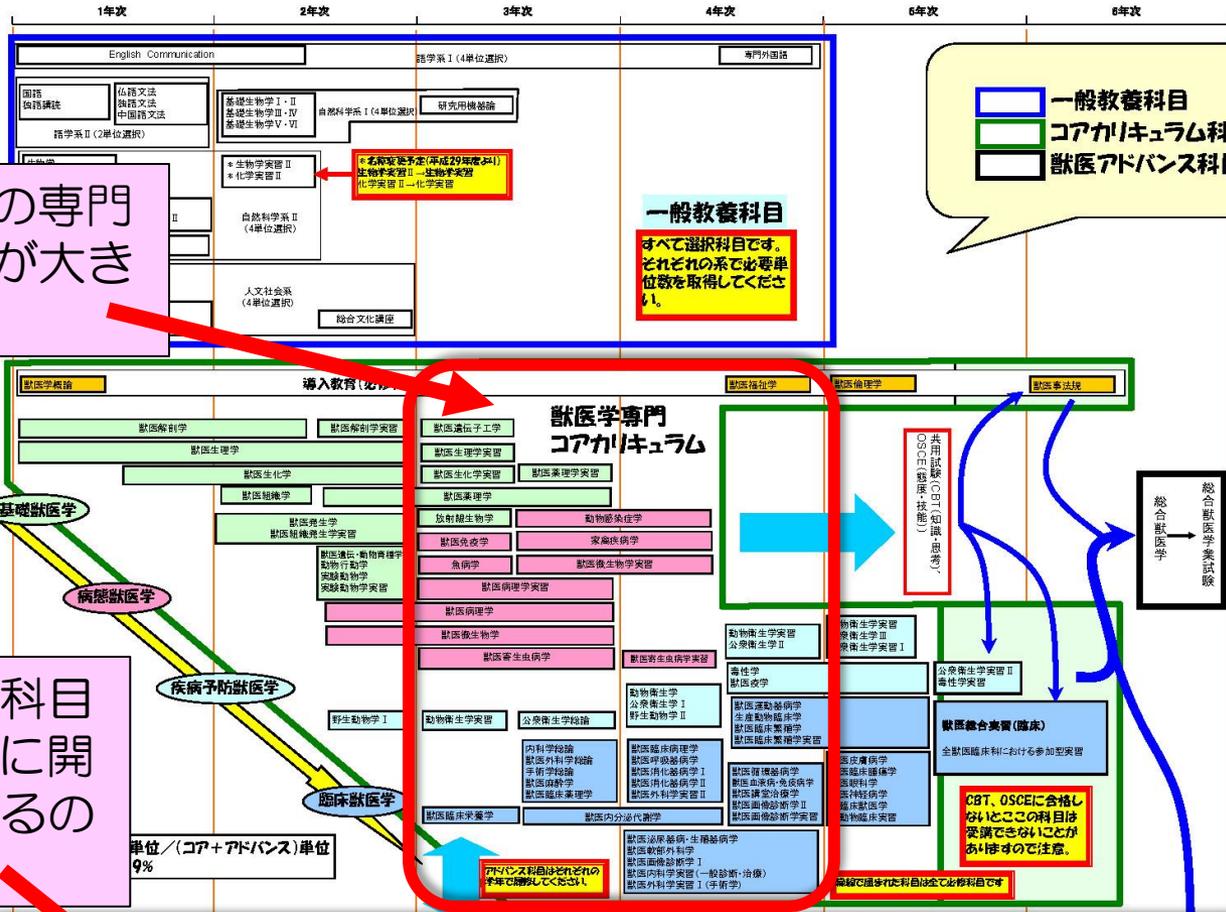
# 試行評価による検討課題

- 一方では、「生物学実習I」「生体分子化学」「化学実習I」「比較細胞生物学」がアドバンス科目として1年次に位置付けられていたことに対し、アドバンス科目の開講時期や選定基準について指摘があった。

⇒ 試行評価の結果を受け、カリキュラムの見直しと獣医学教育改善のための全般的な検討を開始

# 旧カリキュラム（2012年度）におけるカリキュラムマップ

獣医学部獣医学科 カリキュラムマップ 2016.4



一般教養科目  
 コアカリキュラム科目  
 獣医アドバンス科目

**一般教養科目**  
 すべて選択科目です。  
 それぞれの系で必要単  
 位数を取得してください。

3-4年次の専門  
 科目負担が大き  
 い

アドバンス科目  
 が1-2年次に開  
 講されているの  
 は問題

\* 名称変更予定(平成29年度から)  
 生物学実習Ⅱ → 生物学実習  
 化学実習Ⅱ → 化学実習

本邦試験(CBT)と海外  
 OSCE(臨床技能)

総合獣医学  
 総合獣医学実務試験

国家試験

獣医総合実習(臨床)  
 全獣医臨床科における参加型実習  
 CBT、OSCEに合格し  
 ないとこの科目は  
 履修できないことが  
 ありますので注意。

アドバンス科目はそれぞれの  
 学年で履修してください。

履修で選ばれる科目は全て必修科目です

比較動物生理学 生体分子化学 動物の理化学 獣医学概論I	必修科目	生物統計学	卒業研究・卒業論文	獣医臨床病理学実習	獣医熱帯疫病学	夜学演習・実習
* 化学実習Ⅱ * 生物化学実習Ⅱ	比較免疫心理学実習 学外実習	獣医学門系(実習) (3単位選択)	獣医寄生虫学	獣医臨床微生物学実習	獣医熱帯疫病学	夜学演習・実習
* 名称変更予定(平成29年度から) 化学実習Ⅱ → 生体分子化学実習 生物化学実習Ⅱ → 比較動物生化学実習	産業動物品種論 伴侶動物品種論 畜産学概論Ⅱ-Ⅱ	獣医専門系(講義) (2単位選択)	病院経営学	獣医臨床微生物学実習	獣医熱帯疫病学	夜学演習・実習
				必要単位数を取得してください		
				必要単位数を取得してください		
				必要単位数を取得してください		

アドバンス科目

必修科目については履  
 修とした場合、履修でき  
 ません。

# その後の対応

- 2017(平成29)年度に大学基準協会より正式な獣医学教育評価基準が公表された。
- 本学では全学の自己評価委員会の下に「獣医学教育評価小委員会」を作り、毎年各評価項目の達成度を評価し、対応部署に対して改善を促すことを繰り返した。
- 現状では自己評価の判定において91.2%の達成率となっている。
  - しかし評価項目の指摘事項には本学の立地上、早急な達成が困難な項目も存在している。

# 都市型獣医系大学の問題点

- 郊外とは言え東京の住宅地にある大学としては校地の拡充は困難（大学周囲地の路線価は坪126万円）
- 住宅専用地のため建ぺい率、容積率も厳しく大規模な施設拡充も困難。加えて住宅地のために敷地内での家畜の飼育にも制限がある。
- 特に産業動物臨床教育に関しては、キャンパス内での実施が難しいため、学外にある付属牧場と外部機関との協力の下で実施せざるを得ない。
- 基本方針として、ハード面ではキャンパス内の既存施設の改修を中心に行い、ソフト面である教育の充実を軸とした改革を遂行することとした。

# 2020(令和2)年度から導入した新モデル・コア・カリキュラム

- 試行評価の指摘事項を踏まえ、2020(令和2)年度の入学者から、さらに修正を加えた新カリキュラムを導入した。
- ただし、2012年度版コア・カリキュラムで試行評価を受けていることもあるため、今回は全面改訂ではなくモディファイと言った程度の改訂に留めている。
- この新カリキュラムでは、1年次での専門科目を増やす一方で、これまで専門科目の負担が大きかった3-4年次での負担を軽減させ、獣医学共用試験へとスムーズに移行できるようにした。

# 臨床科目の区分改変（学系から系統別へ）

- これまでの臨床科目は学科目が細分化されていたため、各講義ではコア・カリ部分のみならず国家試験の内容も含めて講義をするため、履修に非常に時間がかかっていた。
- そのため共用試験は全臨床科目が修了する5年前期の夏に実施せざるを得なくなり、共用試験の日程がタイトになるだけでなく、学生の負担が大きいという問題があった。
- そこで新カリキュラムでは臨床科目を系統別科目である内科学概論、内科学各論-IV、外科学概論、外科学各論-IVという枠組みに変更し、4年後期までにコア・カリ範囲が終了するようにした。
- また科目名を細分化しないことで、今後のモデル・コア・カリキュラムの改訂、共用試験の出題範囲変更への対応も可能と考えている。

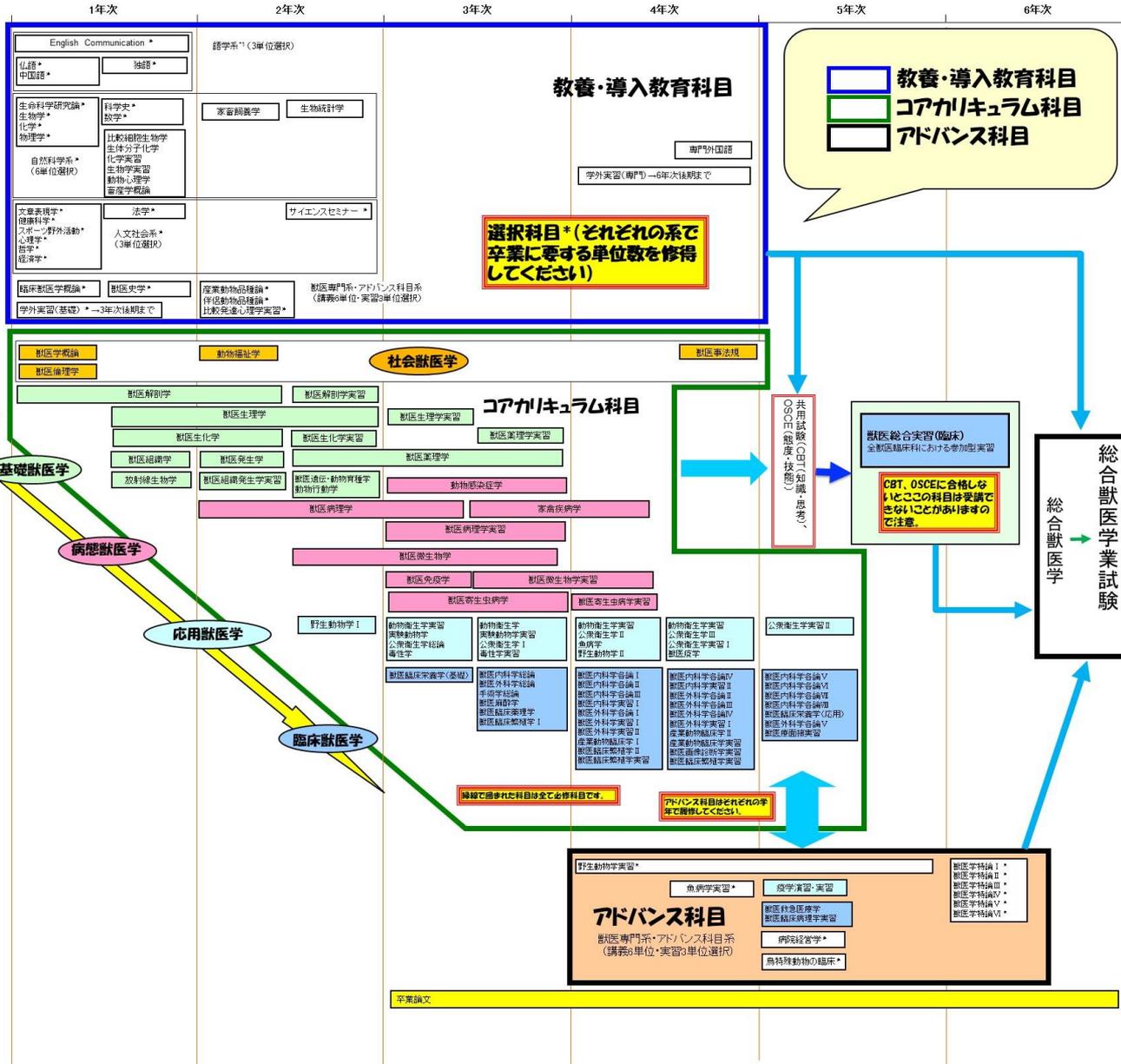
# 新カリキュラムのメリット

- 現在、5年次の6-8月に実施している共用試験を4年後期-5年前期に前倒しして実施することが可能となる。
- 5年次の夏期休業期間を十分に活用できるため、学外施設（農業共済組合）での臨床実習の運用の利便性が向上する。
- さらに、6年次前期に先端的な獣医学の知識を学修するアドバンス科目として獣医学特論Ⅰ-VIを設定した。
  - ▶ この特論では獣医学に関わる諸問題を、教員が所属研究室や研究分野を越えて参画し、最先端の内容を学生と教員が一緒になって議論することができる演習型の講義である。

入学

獣医学部獣医学科 カリキュラムマップ

2020年度以降入学生



# 新型コロナウイルス感染症の蔓延による問題

- 2020年からパンデミックを引き起こしている新型コロナウイルス感染症のために、外部機関での臨床実習は実施が困難となっている。
- 代替策として学内施設（第二校舎）を一部改修した上で、一時的に牛を繋留し産業動物実習を実施している。
- また、富士河口湖町にある付属牧場(富士アニマルファーム)では2019年に牛舎を新築し、今年度からは臨床センターの改修や機器整備も開始しており、学内での産業動物実習の充実化を行っている。
- 今後、本学の獣医学教育をさらに充実させるためには、産業動物臨床施設の充実が必須であり、牧場の有効活用が鍵となる。この点に関しては、本学の経営母体である学校法人日本医科大学と協議を続けている。

# 産業動物臨床実習に関しては学内・学外の併用型が本学の方針

- 本学では宮城および山形NOSAIとの連携の下で、5年次学生を家畜診療所の診療に同行させてもらう学外実習（必修）を長年にわたり実施してきた。
- 現場の臨床獣医師の日常診療に参加することで治療や対応を間近で見ることができるといえる機会でもあり、さらには農家との会話の中で現場での問題点をリアルに知ることができるという点は、大学内での実習では決して学ぶことのできない貴重な経験になる。
- この実習に参加したことで産業動物臨床志望に変更した学生も多いことから継続していききたい実習である。また、試行評価でもこの学外実習と学内実習の組み合わせは、本学の特色として評価されている。



ご清聴ありがとうございました